



TITLE:

# 利子動態説について - 二の批評に 答ふ -

AUTHOR(S):

高田, 保馬

---

CITATION:

高田, 保馬. 利子動態説について - 二の批評に答ふ -. 經濟論叢 1939,  
49(2): 281-295

ISSUE DATE:

1939-08-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/131287>

RIGHT:

# 會學濟經學大國帝都京 叢論濟經

經濟叢論 每月一日發行  
 第四十九卷第二號 昭和十四年八月一日發行  
 大正四年六月二十一日第三號發售處可

號二第 卷九十四第

月八年四十和昭

## 論叢

近世初期の經濟思想……………經濟學博士 本庄榮治郎  
 利子動態說について……………文學博士 高田保馬  
 社會問題と國民的性格……………經濟學博士 石川興二

## 時論

小賣免許制の諸問題……………經濟學博士 谷口吉彥

## 研究

貨幣數量說の動學化としての期間分析……………經濟學士 青山秀夫  
 英國の相續稅……………經濟學士 三谷道麿

## 說苑

京都信用保證協會の設立……………經濟學士 田杉競  
 北京民衆の家計……………經濟學士 菊田太郎

## 附錄

彙報  
 外國雜誌論題

(禁轉載)

# 利子動態説について

——二の批評に答ふ——

高 田 保 馬

私はシユムペタアの利子動態説をうけついで之を支持すること随分久しかつたが、近年に及んでその妥當し得る限界を明確にするとともに、利子のよつて來るところが社會的勢力關係にあること、此勢力關係が資本不足といふ形に於て利子を生ずることを主張した。

私は『經濟學研究』に收むるところの論文「利子の嚴密動態説」にあつては、シユムペタアの利子説を紹介し説明するとともに、其靜態の中から成長（人口と資本との増加、從つてシユムペタアの意義に於ける成長）を除外することによつて、靜態の概念をクラアクに接近せしむるとともに、利子がかかる意味に於ける動態に於て成立することを主張した。これがシユムペタアの原型に於ける動態説ではないにしても、利子を何等かの意味に於ける動態と見る限りに於て、完全に其影響の下に立てるものである。

靜態にあつては何故に利潤從つて利子が消滅するか。これについてはベエム以來の傳統をもつところのシユムペタアの次の主張をあげてゐる。『一方には競争他方には歸屬によりて收益に於ける費用以上の餘剰、生産物の價值に於ける其中の勞働及び土地の用の價值以上の餘剰が消滅せしめらるるに定つてゐる。原本的生産手段の價值は影の如く忠實に、生産物の價值に伴はなければならぬ。二者の間に極小なる持續的差額をも存続せしめない。』私はこれに次の如くに附言してゐる。『費用の原則（これは其實競争をさしてゐる）と歸屬の法則とが上下の兩方より餘剰を削減するといへば、其消滅を速ならしめ均衡の成立を促進するらしくも考へられる。然れども立入りに考ふれば必ずしも然らず。一方に於て費用の原則を認むる以上、歸屬の法則によりて生産財の價格が

1) 高田、經濟學研究、270頁；Schumpeter, Entwicklung, 1. Aufl. 236；中山、東畑、經濟發展の理論、416頁。

上昇して生産物の價格に近づくべしと見る説明は畢竟蛇足である。』この主張が如何なる理論的意義を有するかは後に論及しよう。たゞ私の企圖は靜態に於ける利子の消滅を肯定するとともに、靜動二態の境界線を、シムムベエタアの如く經濟主體の態度の差異いはバレント的選良とも見るべき經濟的英雄としての企業者の行爲の中に認めようとする代りに、單なる與件の變動そのものに認めるところのクラアクの立場に追隨した。いはば、クラアク化せられたる利子動態説こそ私の支持しようとしたところである。

この動態學説は約六年をこえたる後に於てもなほ、小著『經濟學』の中にあつても支持せられてゐるけれども、そこには次の如き變改がみられる。靜態が成立して利潤（超費餘利）が完全に消滅する爲には、與件として資本が一定の數量であることを許さず、いはゞ歸屬と競争とが完全に行はれ得る爲に、與件への適應は資本數量の變動別して増加を意味しなければならぬ。これを次の如き形に於て記述してゐる。『價格に關する費用の原則の完全に支配し得るのは、企業者間の競争の大分に行はれ盡したる狀態に於てである。かゝる狀態を稱して經濟靜態といふ。此經濟靜態の成立し得るが爲には、次の如き條件の備はるを要する。先づ其形成の道行に於ては（前述適應の過程といへるに同じ、競争による價格の切下げと歸屬による費用の増加とをさす）、人口の不變、需要の不變、生産方法の不變が必要なる條件である。』『これだけの條件の下に於て各企業者間の競争が十分に營まれる。』『競争にして十分なる以上、企業者の企業利潤の消失するのみならず、利子もまた消失しなければならぬ。』『此靜態の存立するがためには、資本の一定不變といふことを不可缺の條件となす考がある。然れども企業間の競争の十分に行はるべしとするならば、大小資本間の殘存消滅が已を得ず、其結果資本の變化は必然の成行となる。』

けれども適應が十分に行はるるが爲には資本數量の變動を必要とするといふ此思想は、『經濟學新講』に入つてはじめて、かゝる變動が主として競争と歸屬とを十分に遂行せしむる爲に必要な資本の増加であるといふ形に

2) 經濟學研究、290—291頁。  
3) 高田、經濟學、201—204頁。  
4) 高田、經濟學新講、第四卷、325頁。

まで成熟した。而してこれはアルフレート・アモンの示唆に負ふ所が多い。

アモンのシユムベエタアリ子説に對する批評はすでに、ハイデルベルク紀要(Archiv f. Sozialwissenschaft u. Sozialpolitik)に於て、公にせられてゐる。これは大正のはじめに於て、私にシユムベエタアの經濟理論への興味をうあつけた。たゞ動態利子論の批評としてかゝる一面に着眼することの示唆は昭和の初年に於て、九州帝國大學に於ける會談に際して與へられ、次に東京帝國大學「經濟學論集」<sup>5)</sup>に於ける其論文によつて與へられた。

私は述べてゐる。利子動態説に對しては、『次の如き異論が可能であると見える。たゞ一の生産分枝についてならば、なるほど競争の行きつくところ、生産費と價格とが一致するに至ると考へ得るけれども、此一の生産分枝についてのみ可能なることを産業全般に通じて考へ得べきか。一の産業分枝については、競争がはげしくなれば、他の産業分枝から資本を吸収し得る。而して生産物數量の増加が結局餘剰を消滅せしむるに至る。けれども産業全體についてはこのことが必然的ではない。競争は各産業分枝に於ける餘剰と資本との割合を均等ならしめるとは云ひ得る。資本が餘剰を生じ得ざるほどの數量に於てあることを如何にして保證し得るか。』かゝる思想に對して私は次の如くに答へてゐる。『競争が各産業分枝に資本の分配を十分に落ちつくところまで落ちつかせたるのちになほ餘剰』あるならば、『かゝる状態が果して競争のゆき盡せる状態として許さるべきか。利潤の一部分は蓄積せられるであらう。而して此過程は漸次どこまでも進行する。その結果として終局生産財の價格が引き上げられざるを得ぬ。生産費と生産物價格と一致するに至りてはじめて、此運動は終る。』同一の趣旨を『經濟原論』に於ては次の如くに述べてゐる。『けれども此見解は競争の進行が中途にして止むものと考へてゐる。此場合蓄積の進行が行はれずとは考へ得られぬ。これによつて企業擴張の競争は行はるであらう。而して生産財

5) 經濟學論集、第七卷、三號。  
6) 經濟學新講、第四卷、328—329頁。

の需要は増加し、此需要増加は生産財價格の騰貴を來す。利潤の消滅するに至るまで此運動は進行するであらう。<sup>1)</sup>

これから最近の動態説批判の立場に至るまでには僅に一步である。それは何等の實質的變更を意味するものではない。たゞかつては資本の一定といふことを靜態成立の與件とすることなく、従つて競争と歸屬とが資本の増加と共にどこまでも進行し得るものと考へてゐた。けれども、今や資本の一定といふ與件の下に靜態が形成せらるゝものと考へる。これは經濟理論の一般的なる傳統に従つたのに外ならぬ。かく考へて來ると、靜態に於ける利子の消滅は必然的ではない、そこには利子が殘存し得るし、又進みて考へると殘存が必然ですらもある。それは何故であるか。一方からは競争による價格の引下げ、他方からは歸屬による費用の上昇が相まちて、餘剩を消滅せしむるといふものゝ、資本數量が一定の大さのものである限り、競争によつて價格を引下げようとしてもそれには一定の限界がある。これよりも更に重要なことには歸屬の進行がまた資本不足によつて制限せられる。それゆゑに、資本の一定の條件から出發する限り、靜態にあつて利子の取除かるゝことは出來ぬ。『利子論』から『經濟學概論』に至るまでかゝる立場をとると共に、通用の意味に於ける利子動態説に若干の批判を加へた。而して靜態に於ける利子消滅の必然的でないことを強調した。なほ私の利子理論の展開は一面的には勢力學説の發展である性質をもつてゐるが、これについては何れ後に論及したいつもりである。

## 二

近く中山伊知郎博士によつて、またそれよりも少し前に豊崎稔教授によつて、幸にも私の利子論に對する批評

が與へられたのであるが、それへの答辯が大體かつての私見、別して利子動態説の吟味の中に用意せられてゐると思つたから、態々私見の展開を略述した次第である。以上述べたところを前提とすることによつて、まづ中山博士の批判に答へたいと思ふ。

『高田博士は最近「利子論」に於て資本の一定を直に資本の不足と解することに靜態利子論の最も有力なる根拠があるものとせられ、更にこの資本不足——従つて資本の餘剩價值生産力——の根拠を勢力關係に求めてゐられる。』『しかし吾々の論點は資本の不足が何故に資本の一定と同義であるかにかゝる。さうしてこの點の説明としては結局資本の一定の下に於ては歸屬が充分に行はれ難いといふことに歸するであらう。』中山博士の批判は更に進みて豐崎教授の批評の引用に終つてゐる。

中山博士の見解と私見との分歧點はたゞ、資本が一定してゐるといふ條件の下に於て歸屬が十分に——超費餘剩を除き去るほどに——進行し得るか否かに關する。シユムペेटァは餘剩の存するところ競争と歸屬とが之を取りのぞくといへるに對して、私がかつて競争のみが之を除き得るとのべたのは、競争を廣義に解せざる限り適切なならざる表現であつた。競争は之を狹義に解する限り、而して歸屬の過程を切りはなして考ふる限り、たゞ企業の擴張收縮、ひいては生産部門間の生産財の流出流入を意味するであらう。利潤のある部門に於ては、他の部門の犠牲に於て生産が擴張せらるゝとともに、各企業の生産方法が優秀のものにとりかへらるゝであらう。其結果、各産業部門に於て利潤の取りのぞかれぬ状態が成立し得べきではないか。シユムペेटァはもとよりかゝる事態を否認する。かゝる事態が一旦成立するとしても歸屬によつて生産財價格、従つて費用が騰貴し利潤を消滅

せしめると考へる。<sup>9)</sup>従つて費用法則の支配、餘剰の完全なる除却を保證するものはたゞ歸屬の過程である。利潤のあるところ、これを生産財價格の中に吸ひ上げるところの歸屬の過程である。此意味に於て、若し競争を廣義に解し、企業者同志の生産財買入に於ける價格つり上げの競争をも含ませるときには、競争が利潤を取りのぞくといひ得べきであるが、さうでなく之を狹義に解しようとするならば、かゝる餘剰消滅の役目をもつものは、歸屬のことであるといはざるを得ぬ。而して今の問題はまさしく、資本一定といふ條件の下に於て、歸屬が十分に進行し得るかといふ點に存する。中山博士はこれに對して、シユムペエタアの見解をつぎながら然りと答へらるゝし、私は——數多の學者と共に——否と答へる。問題の所在はあまりにも單純である。

私は自らの主張について幾たびか論證を提出してゐるが、それを反覆するよりも、中山博士の論據そのものを吟味することが、今の私にとつてはとるべき順序であると思ふ。中山博士は、資本一定と迂回生産の利益の可能といふ二の前提が與へられてゐても、餘剰の成立の必然ならざる理由をのべられてゐるが、その中特に注目すべきは次の文句である。

『迂回生産の利益の可能性が存在することは靜態に於ても勿論争ひがたきところであらう。しかし靜態の特色はかゝる可能性の實現が正に資本の一定によつて制限せられてゐる點にある。靜態に於ても、素より與へられたる資本の許す限りの有利なる生産迂回が實現せられる。けれどもこれ以上の有利なる可能性の實現は正に資本の一定といふ條件によりて不可能とせられる。従つて一旦實現せられたる迂回生産がその規模をかへることなくして年々繰返される限り、この迂回生産に伴ふ利益は競争と歸屬とによりて完全に生産要素に吸収せられることとなるべく、かゝる適應の極限を考へる場合に於てはそこに何等餘剰利益と見做すべきものの存在を認め得ないのである』

私が問題とするところは迂回生産に伴ふ利益が必ず競争と歸屬とによつて完全に吸収せられうるといふ點に存

9) Schumpeter, Entwicklung, I Aufl. 47; 邦譯 65頁。



する。餘剰が生産要素に吸収せられるといふのは、利潤の存するところ、生産要素の價格にまで吸収せられなければやまぬといふのに外ならぬこと、前に述べたる通りである。ところが、此歸屬が評價の過程として見らるゝか、又價格形成の過程と見らるゝかによつて、その限界に差異があり得る。私は價值歸屬と價格歸屬とを區別した。<sup>9a)</sup>而して所謂影の如き忠實さを以て生産物の價值に追隨するものは評價の過程に於ける歸屬である。封鎖經濟に於てはそれが歸屬の一切である。故に『生産に於ては一般に費用財の價值以上の價值超過は獲得せられ得ないといふ結果が生れる。生産は唯經濟計劃に於て豫見せられた價值即ち從來既に潜在的には生産手段の價值として存在してゐたところの價值を實現するに止る。<sup>10)</sup>』たゞ流通經濟に於て價格歸屬が影の忠實さを以て行はれ得るか。封鎖經濟に於ける評價にあつては、價值歸屬が何等の手段を必要とせずして行はれる。ところが價格歸屬にあつては、資本主義經濟が前提とせらるゝ限り、必要なる資本を必要とする。それは單なる評價であるに止まらぬ。一の支拂であり、而も生産財價格の前拂を意味する。一方に影の忠實さが認められるからといつて、他方にその必ずしも認められないのはかゝる事情による。『恰も封鎖經濟に於て一定の生産物を目當として生産が行はれる場合にその價值は既に本源的生産用役の價值の中に豫想せられてゐるものでなければならず、又たとへその場合如何に多くの中間生産物を通過するものとしても價值の大きさは同一に止まらねばならないと同様に、流通經濟に於ても亦たとへ生産過程が如何に多くの獨立の經營の下に分割してゐるとしても本源的生産用役の價值及び價格は生産物の價值及び價格を吸収し盡さねばならないのである。』<sup>11)</sup>こゝに私共が問題としなければならぬ點がある。

9a) 高田、利子論、13—14頁。

10) Schumpeter, a. a. O., S. 43; 邦譯 60頁。

11) Schumpeter, a. a. O., S. 47; 邦譯 66頁。

私はこれについて最近次の如くに述べてゐる。『前拂の行はるゝ資本主義經濟にあつては、それに要するだけの資本が存在しなければならぬ。資本の存在數量従つて供給數量が不足するところから、生産財價格以上の餘剰即ち利潤が獲得せられる。従つて資本が不足するところでは、競争が十分に行はれてもなほ、利潤が存立するといはねばならぬ。』<sup>12)</sup>けれども、此點は如何にして論證せられ得るか。一定の生産方法に伴つてどれだけ生産物價額の得らるゝかは、資本數量と關係なく、技術的に定まり得るところである。需要狀況の與へられてゐることを要するのはいふまでもない。ところで、資本數量のどれだけ用意せられてゐるかはその生産物價額とは全く獨立に定まることである。生産物價格のうちだけが生産要素價格として歸屬せられうるかは一に資本數量によつて制約せらるゝ以上、前者が必ず、靜態が前提とせらるゝ以上、後者によつて、吸収せられ盡すといふ論理はない。<sup>13)</sup>

中山博士の説明は次の如くである。

『かくて吾々は迂回生産の利益を示す収益の度盛を一應經驗的な事實として認むることが出来るのであるが、この事實の確立は果して利子の説明に充分なものであるか。吾々はポエームと共に結局はかくの如き經驗的事實が利子成立の一の根據をなすものであることを認める。然し乍らこの根據は端的にいへば一定資本の下に於ける循環を考へる限り何等利子の如き餘剰價値を生むものではない。生産迂回をあらはすところの収益の度盛は資本が一定であつても一定でなくとも、與へられた技術的知識の上に經驗的に樹立されることがである。しかしこの上に資本の一定といふ條件が加はればこの經驗的事實は何等の餘剰収益の源泉とはなり得ない。何故なら與へられたる資本の大きさに於て經驗的に示されたる最有利の迂回が採用せられるならば、この迂回によるところの収益は必ず用ひられたる生産要素に歸屬せしめらるることとなるべく、資本の大きさが更に變動しない限り、年々同一の迂回期間が採用せられることによつて經濟の循環が維持せられるに至るからである。』『資本の量が變動しない限り迂回の長さは更新せられることなく、迂回の長さが更新せられない限りは何れの年に於て用ひられる生産役も全く同一價値を有するも

12) 高田、經濟學概論、216頁。

13) 利子論、13, 37—38頁。

のといはねばならぬ。<sup>14)</sup>

迂回生産によつて餘剰収益があるとしてもそれは全く生産要素に歸屬し、その價格として支拂はるるから餘剰は消滅するといふのがその全論旨である。けれども、率直にいへば私は次の點を認め難い。餘剰を吸収するだけの生産財價格を支拂ひうる爲にはその前拂に十分なる資本を必要とする。而も此資本はたゞ一定せられてゐるだけで、前述の意味に於ける十分の歸屬に必要な高さに一定せられてゐるのではない。その用意なくして、如何にしてそれだけの生産財價格を支拂ひ得るであらうか。たとへばベエムの例示に於て勞銀は五〇〇に定まつてゐるが、年々一〇%の利子が成立する。ところが中山博士の主張せらるる通り『これ以上の有利なる可能性の實現は正に資本の一定といふ條件によつて不可能とせられ、』而してこの迂回生産に伴ふ利益は競争と歸屬とによつて完全に生産要素に吸収せられる』であらうか。それは餘りに明に否。その主張は今の例について見る限り、所與の資本數量に於ては六年迂回の生産が確立せられ、而も此規模が變化せられずして繰返さるる以上、勞銀が騰貴して、即ち一〇%の餘剰を吸収して、無利子の靜態的循環が支配するといふに歸着する。けれども當初より資本數量は各企業につき、六年迂回年勞働六・六を傭入れ、これに三〇〇を拂ひうるだけのものに過ぎぬ。六年迂回生産に於ける單位勞働の収益は六五〇であるから、勞銀が餘剰を吸収するとすれば、ベエムの前提により勞銀は六五〇となるわけである。ところが勞銀が六五〇までに騰貴すると各企業者がそこに止まる理由はない。生産期間を延長して利潤の増加を計るであらう。さうすると十年迂回、一萬日當り一五四日の利潤を擧ぐるに至るはずである。いはゞ六五〇の勞銀に於て六年生産の靜態循環の繰返さるる理由はない。勿論十年迂回にあつては約

半數以上の勞働が解放せられ失業するから、勞銀は必然に勞働者の競争によつて切下げられる。たゞ資本の總量がまさしく一勞働者當り勞銀七〇〇、勞働雇傭數六・六六だけあるならば、はじめて餘剰が完全に消滅し得る。けれどもこれは資本が百五十億グルデンといふ大さに一定してゐる以上、全然あり得べからざることである。要するに、中山博士に於ける假定即ち資本百五十億グルデンといふことと、残りなき歸屬即ち六年迂回生産に於ける勞銀六五〇といふことは、論理的に全く相容れざるものであると考へざるを得ないのであるからうか。

此場合に於ける假定として總資本は百五十億グルデン一企業當り一萬グルデン。勞働者數千萬、一企業當り六・六六。勞銀六五〇といふ假定(これは六年迂回生産に於て勞働收益の全部を吸収するだけの勞銀である)に於ける一萬日當りの年利潤は主要次の如くに概算せられる。<sup>15)</sup>

勞 銀 650H.				
生産期間	一人當り年勞働收益	一人當り年利潤	使用勞働者數	一萬日當年利潤
6	650	0	5.13	0
7	670	20	4.40	88.0
8	685	35	3.86	135.1
9	695	45	3.41	153.4
10	700	50	3.08	154.0

即ち一たび所與の資本に於て六年迂回勞銀五〇〇の均衡が成立したる以上、資本の増加なくして勞銀が新に歸屬せられ騰貴するといふことは想像し得べからざるところである。『生産の建設に際して一度成立した利子は、まさに自由競争の故に生産の循環に於ても不變の高さを維持し、決して消滅することはないであらう』といふ安井琢磨氏の意見は之を承認する外なきものではなからうか。<sup>16)</sup>

15) 高田、利子論研究。中山、前掲書140頁以下參照。

16) 安井琢磨、時間要素と資本利子、經濟學論集、第六卷、九十號、48頁。

中山博士は資本の總量の一定と資本の技術的生産力との共存が必ずしも利子を生ずる理由ではないことについて、アームストロングの例證を引用せられてゐる<sup>17)</sup>けれども、アームストロングの例證が十分に成立し得るものであるにしても、それは一主體を中心としたること、前述の用語を以てすれば封鎖經濟に關することである。私共が問題としてゐるのは流通經濟別して資本主義經濟に於ける價格歸屬の問題である。従つて、後の場合に於ては資本があり、それからの生産財價格の支拂がある。問題の中心はクルソーになるのではなく、市場にあり、資本と生産要素との交渉にある。此理由からかの例證がかりに成立するとしても、それはわれらの問題を説き得べき平面にあるとは考へぬ。中山博士も此點に關して若干の顧慮と躊躇とを示してゐられるが私は如上の理由から此點に正面からの吟味を加へる必要なしと考へるものである。

### 三

中山博士は前述の如く、『結局資本の一定の下に於ては歸屬が充分に行はれ難い』といふことの『證明は博士(高田)に於て果して充分であらうか』と述べられてゐるが、私から見ると如上の私見、此點を證して餘りに明白であると信するのである。而して私が昭和二年以來、資本の一定といふ條件を除去してはじめて利子なき靜態の思念せらるることを述べたる所以も自ら明になると思ふ。

私は資本の不足といふことが價格歸屬を十分ならしめず、餘剰の存立を必然ならしむること、次に現實の經濟組織に於ける資本の一定が必ず資本の不足を意味することを『利子論』に於て詳述した。然るにこれに對して豊崎教授は『生産物價格の費用價格に超過する積極的理由』は明瞭にならずとせられ、而も中山博士亦これに贊同せられてゐる。私は中山博士への答辯を完結する爲にも、豊崎教授の批評そのものに答ふる爲にも、此問題を取り上げねばならぬ。こゝに若干の引用を許されたい。

『けれども何故に生産財價額が生産物價額よりも小であるか。費用法則が妥當するとすれば、生産物の價額は生産財の價額によ

りて規定されるのではないかとの疑問を生ずる。高田博士はこの疑問に對して、資本不足がある場合費用法則は妥當しないとされる。博士の如く費用法則が資本不足の場合妥當しないとしても、なほそれで以て生産物の價額はそれが資本不足によつてその價格を規定されてゐる生産財によつて生産されてゐる限り、何故に生産財の價額以上にならねばならないかの積極的説明にはならない。高田博士はこの點に就て資本の價值生産力を援用する。『(傍點は高田之を加ふ)以上のうち、傍點を施せるところは中山博士によりてまた引用せられ賛同せられたる部分である。』

積極的説明にはならぬといはれるけれども、私見を以てすれば餘りに明白なる積極的説明である。此鉛筆は赤いといつても眼を閉ぢればそれは分らない。明白なる説明も理路の追跡を斷念し、其心眼を閉ぢられると、説明にはならぬ筈である。豊崎教授は此批評を展開するのに費用法則を中心としてゐられるが、それが内在的批評たることを主眼とせらるる限り(理路の核心を追跡せらるることが述べてある以上さう見るべきであるが)さうであつてはならぬはずと思ふ。費用法則はわれらの價格理論の系論であり、特殊理論である。生産物の價格は本來效用に於て定まる。歸屬が十分に行はるときのみ費用法則が行はれる、それが妨げられて十分ならずといふのは、歸屬せられざる部分の殘存することをいふのである。資本の不足といふのは歸屬を十分ならしむるに足らず、不足することをいふに外ならぬ。勿論豊崎教授は此點に關する私見を引用してはゐられる。けれどもそれに續く批評はやはり心眼を閉ぢて見ざるものといふ外はない。

『その(高田の)論證の仕方は次の如く表現されてゐる。』『換言すれば資本の不足の爲に、勞働單位の生産物價額以内のものだけが勞銀として支拂はるる外はないから、資本はその不足が前提せられる限り、技術的生産力を有し、これを産業全體について見る限り價值生産力そのものに外ならぬといふ譯である。それは資本不足の故に勞銀が安定し、費用價格としてのそれが生産物價格に及ばない事を意味する。然しこれだけではなほ生産物價格が費用價格に超過する積極的理由は明瞭にならない。こゝで先きの費用法則が資本不足の場合には妥當しないといふ命題を援用しても生産物の價格が費用價格以上になる積極的原因是明瞭にな

らない。』(傍點は高田之を加ふ)<sup>18)</sup>

答辯の一。資本不足の故に勞銀が安定しといはれてゐるが、これでは私見の根本が逆立にせられてゐる。資本は何故に必ず不足するか、勞銀が階級關係のゆゑに安定性をもつがゆゑである。これが私見であるが、教授はこれを全く逆にとつてゐられる。これは私のいふ、資本不足の意味を理解せられない證據と考へてよくはなからうか。二。費用法則が今の場合に於て妥當しないのは、歸屬せられざる殘餘があるといふことである。生産物價格のうち一部分だけが生産財價格に吸收せられ、そこに吸收せられざるものがあるといふことは、費用以上の生産物價格があるといふことに外ならぬ。甲が十の菓子をもつてゐるのに、乙がそれから一部分だけをとるならばやはり甲の手に餘剩が残るはずである、残ることについてそれ以上の論證も積極的説明もいるはずはないと考へられる。費用法則が妥當せぬといふことは費用が生産物價格以上でも以下でもありうることはないかといふのが豊崎教授の意見ではないか、さうでも考へなければ其批評の意味も成りたちかねると思ふが、さうであるならば次の如くにいふ外はない。今の場合、費用法則が妥當せずといふことの意味はたゞ歸屬せられざる殘餘の生産物價額があるといふことに外ならぬ。私は歸屬の不十分、歸屬し盡されぬといふ表現を用ひてゐるが、費用法則の妥當せぬといふことに、これらを置きかふと、何の誤解も残らなくなると思ふ。以上を以て豊崎教授の批評に答へたるわけである。

#### 四

動態をまつてのみ利子ありや如何といふ表現の肯定と否定とは、私にとつて別に深く問題とするを要せざるこ

18) 豊崎稔、文獻紹介、經濟學雜誌、第二卷、第六號、82—83頁。

とも見える。それは靜態といひ動態といふ概念の内容があまりに區々であるから。たとへばベエムはシユムベエタアにあつて人口の増加、資本の増加、需要の變動等に對する適應、然り奴隸的なる、強制せられたる、受動的なる適應をも靜態の事象に數へられてゐることを注意してゐるが、このシユムベエタアの靜態はそれが著しく影響を受けてゐるクラアクのそれとも甚しく異なるものがある。それゆゑにベエムは其利子説を提げてそれは靜態にも利子ありといふ理論であるといひ、シユムベエタアはベエムの利子説に於ける動態的要素を認めようとしてゐる。私はいま此問題に深く立入らぬつもりである。たゞ此際述べようと思ふことはたゞ利子が資本の不足にとづくといふ一點である。

勿論資本の不足によつて利子があるといふことは決して少數の人人の主張ではなく、利子理論に於ては種々異なる立場をとる人人の間に支持せられてゐる。私はたゞ手許から一節を引き出さう。ベエムはいふ。シユムベエタアといへども迂回生産の収益性即ち生産迂回の法則を認める。<sup>20)</sup>これを認むる以上、現存するところの生存資料即ち迂回生産を實現する手段に對する需要が生ずるはいふまでもない。けれども打歩なくして之を供給しようといふ供給者があるならば、需要はこれに對して無限に増加するであらうし、従つて供給はこれをみたすに足らず、自然需要の制限が行はるることとなり、將來の生産物と此手段との交換に於て必ずや打歩従つて利子を生ずるに至るであらう。このベエムの主張は資本の不足が利子を生ずるといふ見解の一の表現の仕方である。前に述べたる私見とこれとの間に根本的な差異はないと思つてゐる。靜態であるか動態であるかを今の點に於て問題とする必要はまづないと思はれる。要は資本がどこまで豊富であるにかゝる。

19) Böhm-Bawerk, Eine dynamische Theorie des Kapitalzinses, Zeitschrift für Volkswirt. usw., 1913, S. 4.

20) a. a. O., S. 21, 28.



このころ、ナイトをはじめ多數の學者はベエムの生産構造の見解に批評を加へ、それが餘りに現實から遠いものであることを説く。此批評そのものの肯定せらるべきことは私の屢々論及したところである。けれどもその生産構造を前提とすることによつて述べたる利子論、「利子が資本の不足に基く」といふ一點についてはたとへ如何なる生産構造觀をとるにせよ、否定せられがたきところであらう。資本の問題をすべて生産の世界から解放して、たゞ收支の流れについてののみ、又は收支の差額である餘剩の流れについてののみ（フィシヤ又はヒックス）考へようとする立場をとるにしても、買はるべきものは來るべき流れであるが、買ふべき手段は現在の貨幣價值量である。後者の供給がどこまでも豊富であるときにはその程度に應じて打歩が漸次に減少してゆく、後者の不足する程度に應じて打歩が減ずるから、來るべき流れの資本化せられたる價值が増加する。たゞこれらの點は別に獨立の考察を必要とする問題であると思ふが故に、たゞ資本不足といふことがどこまでも重視せらるべきことを附記して此稿を終る。

終りに中山、豊崎兩教授に對し、厚く其教示の勞を感謝すると共に、答辯若し禮を失するところあらば切に其寛恕を請ふ次第である。蕪辭當らざる所も多からうと思ふ、重ねて教示を得ば深く幸慶とする所である。

（七月中旬研究卒にて）

21) J. R. Hicks, Value and Capital, 1938, chap. XVI, p. 202 et seq.; Fisher, Theory of Interest, 1930, p. 158, et seq.